

## 明治19年のコレラ大流行

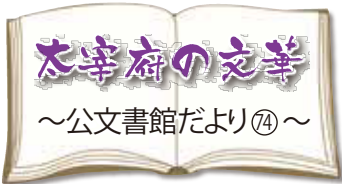
文政5（1822）年から大正9（1920）年まで、国内で幾度かの大流行が見られたコレラは、その症状の激しさや致死率の高さからも、かつての日本で最も恐れられた伝染病でした。人々はその性質から獐猛なトラをイメージして「虎列刺」などと表記、罹患すれば警官による隔離、あるいは避病院への収容から免れることができないため、発病の隠蔽も起りました。

近代に入ってから最大の流行は明治12（1879）年の大流行と言われますが（患者16万2637人・死者10万5786人）、西日本が中心となった同19年の流行は、患者数はやや下回るものの（15万5923人）、死者数は増加しています（10万8405人）。同16年、ドイツのコツホがコレラ菌を発見しますが、効果的な治療法の確立まではしばらく時間を要したようです。

明治19年の流行では、1月1日の患者発見から終息まで丸1年を要し、福岡県では4月末から12月下旬にかけて、患者数1626人、うち死者1072人が数えられました（『官報』）。この間太宰府では戸長1名が罹患・死亡、その折の警官の「親切」が、意外性をもって報じられています（『福岡日日新聞』）。

患者発生の通報を受けた二日市分

署長は、巡査を連れて戸長宅へ出向き、まず家を竹柵で囲んで「交通遮断」を行います。その後、苦しむ戸長の枕元で「懇ろに病苦を慰問」の後戸長は死去、「田舎のことなれば容易に雇うべき人夫もなきのみならず伝染の恐れもあれば」と、福岡本署から駆け付けた警部と二人で丁重に出棺までの処置を施しました。



戸長とは、簡単に言えばその地域の行政事務の責任者です。また亡くなった戸長は、かつて大島左

京と称した人物で、太宰府天満宮の延寿王院の由来の一人でした（『太宰府市史 通史編Ⅱ』）。幕末には国事に奔走したとも言われ（『福岡日日新聞』、慶応元（1865）年から同3年の記録「延寿王院御用日記」にも登場します。伝染病対策のための隔離・収容を主導し、当時「鬼

の息子が蛇の孫のごとく」恐れられていた警官による意外にも挺身的な行動は、地域の貢献者に対する敬意の表れと同情であったかもしれませぬ。

この年には、太宰府天満宮の神幸式大祭も、流行が下火となった11月に延期して開催されました。伝染病の流行下では、当時から神事など大きな行事のスケジュールも変更やむなしとされていたようです。

公文書館 藤田 理子